

メープルレター（74）

切れ切れの夏

窓辺をみやると、セントローレンス河の水面に金色の照り返しを作りながら、ゆっくりと朝が明けていきます。少しずつ朝が早く明け、少しずつ夕暮れが遅くなり、冬場の長い夜の辛さを取り返すかのようです。日の長さが12時間以上になり、夜遊びでない昼遊びのみの日が、二か月間ほど続くこととなります。

このところ、気候の移り変わりが激しく、快い夏は、ほんの時折り切れ切れにある程度です。その上、地球の温暖化の影響で、カナダのあちこちで大規模な山火事がおき、ついに北の山火事の煙がモントリオールまで風に乗ってやってきました。黒ずんだ空に焦げたような匂いのする煙が薄くたちこめ、事態の深刻さを語っているかのようでした。

ドリトル先生は、気候にも世相にも左右されず、毎日、水槽の水を半分ほど変え、カラフルな可愛らしい熱帯魚（淡水）達に語りかけ、餌をあげたり、ぼーっと眺めたりしております。船も、修理中のため、手入れもできず乗る事もできないようです。コロナ禍以来の人出不足の波がこんなところまで来て、修理が間に合わないようです。ジーっと我慢の子とっております。

マダム田中は、一度だけ孫娘と保育園デートをしてピックアップにつきあい、楽しく1時間ほど過ごしましたが、その後は予想もしないスケジュールが次々と入り、多忙となり、6月に入って以来、老体に激しく鞭打って頑張っております。昨年1年間は身動きができず、何も出来なかった跳ね返りの大きさに啞然としております。6月の始めは、例年通り、いけばなインターナショナルの華道展がありました。昨年は華道展と同時に50周年記念を祝うことになっていましたが、事故で参加不可能となり、行事の運営を友人に託し、じっとリハビリに励んでいました。

今回は、現プレジデントから、

「今年は、私の代わりに貴女がスピーチ（フランス語と英語です）してくれるかしら。行事は滞りなく準備しておくけど、当日の夜は、来られないから。」

片目を失明しているので、光の少ない夜は車の運転ができないし、うつ病とパーキンソン病を抱えるご主人を長くは一人にはしておけないと友人は語っていました。老後を生きる重さを感じます。

「去年、プレジデントを代わってもらったから、今年は代わりに頑張るわ。」

「そうそう、そうして。持ちつ持たれつかしらね。」

ともかくスピーチの用意をしなくては、と思い始めた矢先のことです。華道展運営委員長から、

「和子、会場のセッティングの日、仕事で行かれないから、代わってくれるかしら。」

「わかったわ、頑張るわ。」

更に2-3日経つと、日本館館長から電話が入りました。

「マダム田中、日本館の設立に貢献してくれた大事なお客様が日本からいらっしゃるので、感謝状授与式と昼食会をすることになったのです。植物園（日本館はモントリオール植物園にあります）及び関係者が集まりますので、出席していただけますか。それと、できれば、お花も活けていただけないでしょうか。」

「えー！！」

華道展の準備に入る直前のことです。時間があまりにも限られていました。

常に力を貸してくれている、チャーミングで優しい日本館館長の依頼は断れないのです。あー痛しかゆし。考えた末、

「お花は、日本庭園か植物園の花や枝を切って用意していただけますか。とてもそこまでは手がまわりません。むしろ、お庭の季節の花の方が、記念式典にはふさわしいような気がします。」

「庭師に言って、用意してもらいます。」

日本の庭師に訓練を受け、長い間日本庭園を守ってきてくれた庭師なので、きっと良い物を見つけてくれるだろうと思っていました。記念式典前日の活けこみに用意してくれたのは、見事なボタンや芍薬の花でした。その美しさをそのままいければ良い、そう語っているかのようでした。枝や小さな花を取り合わせ、簡単ながら、華麗な活けこみが出来上がり、何とかその場の雰囲気作りには役に立てたようでした。歴代の植物園園長達や、日本館及び日本庭園設立に

奮闘された方達が出席され、設立の流れを伺うのも興味深く感動的でした。設立当時の園長はその後市長となられ活躍された方でもあります。歴代の園長達のうち、退官後上海植物園の立役者ともなられた、いけばなの良き理解者だったイケメンの園長もおられました。こうして、歴代の園長達との昔話しに、ひとしきり花も咲きました。モントリオール植物園はロンドン植物園に続く、世界第二位の植物園であり、日本庭園は北アメリカ第一位の日本庭園でもあります。もっとも、植物園は今は改装工事中のため、ここはアフリカか、というような荒れた雑な部分もありますが。。。いずれいつかは、あの美しさをもどるかも。。。

さて、本番の華道展は、母親が愛し、絶やすことのなかったいけばなをこの華道展で活けてほしいと、元プレジデントの一人のご家族の特別な依頼があり、追悼をすることにもなりました。地元の名士の一族の出の方で、いけばなの発展や日本との文化交流に貢献された方でもあります。同じ流派のメンバーに大きな活けこみをしてもらい、懐かしい、思い出をご家族と一緒にたどることになりました。オープニングセレモニーに出席されたご家族は、活けこみとその傍らの母親の写真を見て涙にむせんでおられました。コロナ禍も終わり、時の運にめぐまれたのか、この華道展には6千人にも及ぶ方々がいらっしゃり、メンバーは接客に会場を走りまわっておりました。

スピーチを始め、依頼されたミッションインポッシブルを修了し、しめは、総領事館公邸での夕食会となりました。天皇誕生日祝賀会や日頃の文化活動で頑張る女性（おばさんかな？）3人が公邸に招待され、総領事や文化担当の領事と飲んだり食ったりの肩を張らない、無礼講の楽しい時を過ごしたのです。

え、ドリトル先生ですか？ドリトル先生は家でずっと冷や飯を食っておりました。とはいえ、マダム田中が暇になり、やっとまともな暮らしのリズムと食事が戻り、誰よりもホッとしているようです。